

# 名人・達人 評判倶楽部 THE GREATEST PEOPLE

現場は“野菜畑”です

## PROFILE

清水 善一

(株) シミス社長、当協会会長を務める。  
生まれ/昭和8年11月 滋賀県東浅井郡  
血液型/B型  
信条/今日の出来事は今日解決する。  
夢/健康で皆さんのお役に立つこと。  
好きな言葉/人の道の後を行かず、  
道を拓いて行く。  
嫌いなこと/私利私欲



ZENICHI SHIMIZU

『産廃あいちVOL. 8』よりスタートした本ページも2回目を迎えました。今回のインタビューは、当協会会長の清水善一(株)シミス社長にご登場いただきました。インタビュアーの花井さんが、どこまで清水さんの特技に肉薄するか。またその特技や自慢のタネとは？

### 天皇陛下にも献上した名古屋コーチン。

—清水さんにお話を伺うなら“名古屋コーチン”のことを聞け、と、そう言われて来ました。コーチンもご商売のひとつなんですか。

清水社長(以下清水に略)「いやいや、趣味の域を出とりません。娘が料理屋をやっていますんで、そこへは出していますがね。昔から「バカの鶏飼い」とか言われてまして、それこそプロイラーチキンのように機械化して大量にやらない限り、鶏というのは儲からんものなんです。」

—ご本業もお忙しいでしょうに、コーチンを育てるといのは大変なんじゃないですか。ましてや儲からないとなると……(笑)。

清水「これはもうね、人さまが「おいしかった」と言ってくれるのが嬉しいんで、それが励みなわけですよ。もともとはね、最近トリの肉がまずい、おいしいトリが食べたいということと、名古屋コーチンを普及させようというニーズが僕に内外でひとつになって、それなら、ということで始めたんですわ。最初からお金儲けとは別のことと考えてるんですよ。」

—自分で育てたコーチンの味は、清水さんにとっていかがなものでしょう。

清水「僕は食べん。コーチンは一切食べられないのです。」

—えっ！トリ肉はもともと好きじゃないんですか。

清水「いやあ、昔は食べたんですけどね、小さなヒナの頃から育ててるでしょ。なつきますし、やっぱり可愛いし、自分では食べられないですわ。今はウチの会社の定年退職者の人に手伝ってもらってますけど、さっきも僕、エサの菜っ葉を刻んどったんですよ。エサ持って行くとね、ワーツと寄ってくる。嬉しそうでねえ……。」

—でも、やっぱり「お肉」になって食卓にのぼる運命……。

清水「そうなんですよ。だからこそ、「おいしい」と言ってもらうと嬉しい。供養ですわね、その言葉が。」

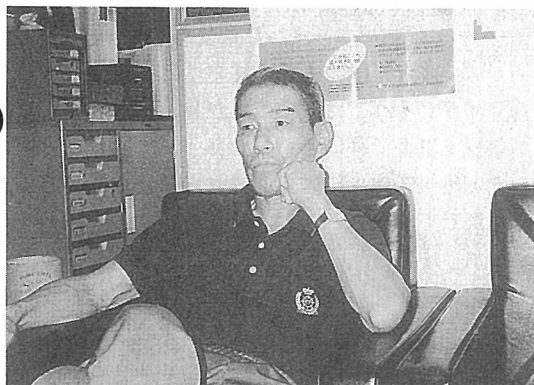
—ご自分では召し上がらなくても、おん自らエサの菜っ葉を刻むくらいですから、味は日本一だと思ってるんじゃないでしょう。

清水「絶対自信持ってます(笑)。一昨年でしたか、天皇・皇后両陛下が、植樹祭だったと思うんですが、こちらの方へいらっしゃったんです。その時、ホテルの晩餐で名古屋コーチンの料理が出て、皇后様が、これがおいしいから持って帰りたいとおっしゃったんです。それでその晩、名古屋コーチン普及協会からウチへ電話がかかってきて、コーチン5羽分を明日の朝までに何とかし



てほしいと言うんですわ。あの時は大変でした。でも嬉しかったですね。』

—— それはホントの名誉なことですね。名古屋コーチンというトリ肉は大変おいしいと、両陛下



が実感なされたからこそなのでしょう。コーチンの保存・普及というのは、それに関わる方々のいろいろなお苦勞がおありうだったようです。

清水『それがね、最近、ほかのトリとコーチンをかけ合わせてハーフを作る人が出てきた。コーチンというのは小さなトリで、3キロにもならないです。ところがハーフは4キロ以上の大きさになる。肉はたくさん取れますが、味は推して知るべしです。そうしたものを「名古屋コーチン」と言って市場へ出されると、本来のコーチンの評判が落ちる。僕はこれが残念でなんのです。』

—— 保存と普及に努めていただかないとなりませんね。ご本業の時間を取られちゃうかも。

清水『僕はもう、あまり現場へは出んのです。若い人がやりにくい。それと僕が何でもかんでもやっちゃうと、社員が甘えちゃうことにもなりかねない。だから、まかせないようにしてます。まかせた以上、責任持たせて口出ししない。もう現場のことわかりませんわ(笑)。』

—— すると今、何に一番重点を置いてらっしゃるんですか。

清水『僕の仕事は処分場の確保ですな。これには頭痛めします。ゴミを出さない人はいないわけで、

出た以上処理しなければならないでしょ。そのため土地がある。もう少しこのゴミ大国で生活する一人一人の人に、ご理解いただけないもんでしょうかねえ……。』

—— あらあら、お顔が曇ってきましたよ。協会の会長さんの顔になりましたね。

清水『いやいや(笑)。あとそうですねえ、協会関係に用事がないと、天気が良ければ畑へ行っとるねえ。わっはっはっ。』

### 大地に汗して野菜と語らう 趣味の域を超えた有機栽培

—— ご趣味の家庭菜園ですか。

清水『車で3、40分のところにある畑があるんですよ、豊明に。白菜、キャベツ、大根、ナス、瓜、トマト……僕は自然のものが好きだから、全て有機栽培。120坪の土地に耕うん機2台入れて、一人でやっとなります。』

—— まーっ、家庭菜園どころじゃない、本格的なんですね。そう言えば外のガレージに玉ねぎが吊してありましたが、もしかしてあの玉ねぎも？

清水『ハイ(笑)。野菜はおかげさんで買ったことないですわ。天気がいいと朝の5時から8時まで畑へ出てね、帰って朝ごはん。うまいねえ(笑)。畑で一人で野菜いじりしてると楽しいしね。』

—— 有機栽培と聞くと、手間ヒマかかってむつかしそうな気がしますが。

清水『百姓の仕事自体むつかしいもんです。天候が左右するし、収穫するまでというか、食べてみるまで成功か失敗か判断はできんしね。肥料と水をやればスクスク育ってくわけじゃなく、虫は



つく、カラスにはつつかれる。いろいろありますわ。』

——でも野菜の味はいいんじゃないですか。有機栽培の野菜なんて、もう一般的には口に入らない時代ですからね。

清水『それなんですけどね、自然の生き物というのは、そうしたことをよく知っとなりますよ。畑の近辺にはキジが来るんです、親子連れですわ。それがウチの野菜ばかり食べる。瓜なんかね、ああようできた、って喜んで、もうすぐ食べられるなどワクワクしていると、尻の甘いところからうまいこと食べていくんです。カラスも来る。ちょっとは隣の畑に行ったらどうだと思んですが、隣は化学肥料でやってみえるんですな。同じように野菜が実ってるのにこっちはかり来るのは、きっとそれだと思んです。』

——でも、清水農園の品質の高さをプロに認められたようなもので、困るけれどちょっと嬉しい？

清水『複雑だねえ(笑)。この間、例のキジがね、こーんな小さいのを5羽も6羽も連れてウチの畑の前を歩いとるんですわ。うわあ、これからどうしようかなあって頭抱えました。しかし、不思議なものですなあ。親のやってた百姓がイヤでイヤで滋賀の田舎からこっちへ出てきたのに、今は好んで百姓やとるんですから。』

——お百姓仕事の醍醐味からはもう離れられないんじゃないですか。

清水『そうねえ。畑へ行くとね、野菜が話しかけてくるんですよ。僕がこう、畑の前に立つと、急にザワザワとする感じで、野菜が何か一生懸命訴えてくる。水くれ、虫にくわれて痛い、お天道さん照ってほしい。クタツとしてたのが水やって30分もすると、ピーンと元氣

になって風に気持ちよさそうにそよいでます。たまりませんわ。野菜の世話をしながら、いろんなことも考えます。落ち着いた気分で邪魔は入らないし、仕事の考えもよくまとまります。』

——まさに畑は清水さんの「現場」なんですねえ……。名古屋コーチンに畑仕事というと、何かずいぶん年配の人の隠居生活的な感じがするんですが、そうではないことが良くわかりました。ポロシャツ姿で声にもハリがあって、事務局で伺ったお年(60歳)には見えませんが、お酒の方はいかがですか。

清水『好き好き(笑)。おかげで糖尿病になってインシュリン打ってましたが、自力で治しちゃった。でも、今はビール、日本酒はやめにして、ウイスキーです。毎日5時になるとピュッと2階へ上がって(自宅の一階が会社)、テレビ見ながら一杯飲む。これもいい時間なんですなあ、実に。』

じっとしているのがキライなんですよ。

——今日は意外づくしです。清水さんといえば、地元名古屋では有名な高額納税者ですよな。その清水さんの家の前には玉ねぎが吊ってあるし、



ご本人はポロシャツ姿。お話を伺っていると何かこうフワッと身軽で構えがなくて、お金はあまり要らないようなライフスタイルですね。』

清水『高額納税者というのは、収入のほとんどが税金に持ってかれる人のことですよ。』

## INTERVIEWER

花井 美紀

(株) コミュニケーションデザイン代表  
イベント司会・コーディネーター、  
ビジネスマナーインストラクター、  
信用金庫協会女子職員講座の専任講師。  
TV、ラジオ等で現在活躍中。



——溜め息つかないでください (笑)。

清水『昔はお金もよくつかいましたがね。いやあ、金はさわらん方がいいです。今は要るだけオカアチャンにもらってます。この時代だから何があるかわかりませんが、畑にいけば食べるものはある。食べ物さえ確保しとけば生きていけるからねえ、怖いことないです。僕がコーチンやったり野菜やったりするのは、好きなだけじゃなくてどこかにそういうのがあるからでしょうな。結果として自然に戻るんだ、という……。』

——自然といえば、大変いい環境に恵まれたところで、会社の保養所をかねて民宿をやってらっしゃるそうですね。

清水『僕の田舎の滋賀と福井の県境です。町おこしの一つとして地元から相談を受けまして。「せせらぎ荘」っていうんですわ。今もウグイスが鳴いています。山紫水明、夏は涼しい、冬はスキーが

できる。溪流がこう、サーッと流れてましてね、そりゃいいところです。この6月26日にオープンして、もうじきテニスコートやらもできるんですが、山菜とりでも人気のあるところなんですわ。そこでもウチの名古屋コーチンを味わってもらいます。』

——山紫水明の地で日本一のコーチン料理が食べられる「せせらぎ荘」ですか。いいですねえ (笑)。奥様と保養にいらっしゃって、あちらでも畑をいかがですか。

清水『保養どころか当分は手伝いに行かなきゃなんのです。スキーのお客さんが多いでしょ。この冬の土日は忙しくなりそうで、困ったもんです。』

——と言いながら、お顔が嬉しそうですね。

清水『いやあ、じっとしてるのがキライなものですから (笑)。

